日中の「酒」にまつわる諺に見られる日本人と中国人の発想

王　雪

0. はじめに

諺は言語芸術の一表現形式として、特に節奏性に富む簡潔な言語形式のなかに、思想性豊かな人生哲学が凝縮され、人々の日常行動の指針ともなっている。諺の表現の中には様々な世界が表現されている。諺の世界でも酒は人類の文化・歴史とは切っても切れぬものであったことが窺える。古今東西、酒にまつわる諺や名言名句は数え切れない。先人は酒に対する思考と賛否を諺の中に預けており、様々な考えが構築されている。本稿では、酒に関する諺の世界に焦点を当て、日本と中国の酒にまつわる諺から見られる両国国民の発想の共通点と相違点を明らかにしてみる。

ところで、酒の歴史と言えば、中国では既に禹王の時代から、酒が史書に登場する。酒は百楽の長と言われるが、それは漢の時代の「食貨志(米穀・財貨の歴史をしるした巻)」という本から出てきた。日本では縄文時代に既に、酒が造られていたと言われている。米の作り方を伝えた人たちが、同時に米を使うお酒の造り方も伝えたそうである。酒が作り出され、それを飲むことが増えるにつれて、酒についての諺も生み出されてきたのであろう。酒がどんな役割を果たすかあるいは、その効果はすべて人間次第である。「酒に関する諺には、大きく分けて酒を賛美するものと、酒の害を説くものとの両者がある。物にはすべて長所と短所があり、美点すなわち欠点である場合が多い」と鈴木(1962：110)は述べている。酒に関する日中両国の諺の対照比較をしてみると、表現の面白さ、それに組み込まれている両国の多様な処世術、見方、人生観も窺うことができる。

金子（1983：336）は「特殊という面に向ければ、素質・風土・生活・歴史などをそれぞれ異にする各国民の生んだ諺に、それぞれ特殊な国民性が見られることも当然であるし、普遍という面に目を向ければ、共通の人間性が見られることももとより当然である」と述べているように、本章の考察方法として、金子の研究を踏まえ、まず、「普遍」という面から、両言語の「酒」における類似する諺を対照比較する。そして、「特殊」という面から、両言語の「酒」に関する諺を対照比較し、そこに託される日本人と中国人の発想の類似点と相違点を見出す。

1. 研究対象と研究方法

本研究対象として取り扱うのは、日本語と中国語の「酒」に関する諺である。

まず、日本語の諺の用例は『故事・俗信ことわざ大辞典』（尚学図書編集、1981）を

中心に、さらに、西谷が編集した『たべものことわざ辞典』(2005) と『日本の粋を伝えることわざ　酒』を補足資料として諺の用例を取り出している。『故事・俗信大辞典』はいろいろな由来をもつ諺や俗説など、日本社会に根付き、その歴史の事実を正しく理解し、批判的に読むために、約四万三千項目をおさめている。日本の人々の姿を日本の言葉、民俗という視点で捕えるための参考として、また、もう一つには、社会のひずみ、歪んだ発想や偏見、人間の業の深さを見る資料として、分かりやすく配列し、歴史的事実を現代の糧として、よりよき対応を生むことを目的に編纂されている辞書である。この大辞典には、さまざまな成り立ちの表現が、文献・資料として記録され、専門事典としてこれまでにみられない規模のものとなっている。また、永山 (1998) が編集した『日本の粋を伝えることわざ　酒』は、酒に関する諺だけを集録したものである。

一方、中国語の諺は、温端政などが編集した『中国谚语大全』(2004) と『谚海』(1999) を中心に、諺の用例を取り出している。この辞典は、中国の『国家社会科学の基金項目』の「言語俗語の語彙材料のコンピュータ処理とそれに関わる言語学問題の研究」の最新成果として、これまでにない規模で行われた研究プログラムの一環である。『中国谚语大全』は約十万項目の諺を集録している。中国の現代諺辞書において、諺の数で最も規模の大きい諺辞典である。古今の文学作品からの用例や古代文献及び方言からの引用もなされており、内容的にも、詳しい例文を加え、難解の語句についても解釈が付けてある。また『谚海』は古今の一万九千項目の諺を収集している。諺に対する説明と解釈もつけてある。以上の両辞典の解釈と例文の意味を通じて、中国語の諺への理解もいっそう深まるようになる。

以上の研究資料から「酒」に関する諺用例を取り出し、日本語の「酒」に関する諺にＪとアラビア数字をつけ、中国語の「酒」に関する諺にＣアラビア数字というように順番をつけることにする。特に、中国語の諺用例に対しては、直訳的な日本語訳を付している。

研究方法として、両言語の「酒の飲み方」、「酒の両面性」、「酒と人間性」、「酒と人間関係」、「酒と女色」、「酒と健康養生」、「酒を飲む礼儀」といった共通の話題を語る「酒」に関する諺、及び両国における形と内容が類似する諺に現れる文化的特徴と異なる諺に見られる両国民衆それなりの発想を明らかにする。

2. 酒に関する諺に見られる両国民衆の発想

2.1 共通話題を扱う諺に見られる両国民衆の発想

同様な話題を扱う諺でも、物事を見る立場が違うことなどから、表現の仕方や、語られている諺の内容も異なっている．これは両国の生活習慣や発想の違いに関係があると思われる。上に述べてきた「酒」に関する共通の話題を扱う諺の対照関係を下記

の表でまとめてみる。

特に共通の話題を扱う諺に、「酒の飲み方」、「酒の両面性」、「酒と人間性」、「酒と人間関係」、「酒と女色」、「酒と健康養生」、「酒を飲む礼儀」という面から分析を行ってみたが[1]、「酒の飲み方」では、少なく飲むと体によいことになるが、多く飲むと体に悪い影響をもたらすと語られている。「酒の両面性」では、日中の諺とも酒の良し悪しが述べられている。「酒と人間性」では、日中とも、人間の悪いところを暴露すると言及している。また、日本語の諺では、酒を飲むと、人間の表においては、悪口雑言を口に出すが、裏では、普段見えない人間性の姿が見られるといっている。最後に「酒と人間関係」では、日本語の諺では、裏切られる人間の様子と複雑な人間関係が語られている。中国語の諺では、酒が人間関係をスムーズにするための欠かせないものであると述べられている。それぞれ民衆は酒に映している人間関係への発想が窺える。「酒と女色」では、両言語の諺ともに、女を軽蔑し、女色を戒めるべきであると述べる一方、女の社会地位が低かったことを反映している。「酒と健康養生」では、酒を適量に飲むと、体によいが、飲みすぎると、体に悪い影響をもたらすと述べている。「酒と酒宴の礼儀」では、日本語の諺は、酒席上の礼儀作法を述べており、中国語の諺は、酒席上の遊び方と酒を飲むことが遠慮すべきものでないと述べている。以上、日本語と中国語の酒に関する諺の対照考察を試みた。酒に関する諺には、酒の風俗習慣が反映されている。酒の風俗習慣では、民族の心理と性格特徴などを表わしている。諺から、日中両国の民衆の酒に対する発想がどうなっているかを窺うことができる。

表１　共通話題を扱う諺に見られる両国民衆の発想の対照表

<table>
<tr><th></th><th>諺に見られる日本人の発想</th><th>諺に見られる中国人の発想</th></tr>
<tr><td>酒の飲み方</td><td colspan="2">酒を飲む時、少量は益であり、過量は損である。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">酒の両面性</td><td colspan="2">酒の両面性とも言及している。</td></tr>
<tr><td>様々な比喩表現が用いられ、酒の良い効果と悪効果が語られる。中国に出典のある諺が多い。</td><td>酒は病を取り除く薬である。直接酒の良し悪しが述べられている。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">酒と人間性</td><td colspan="2">酒を飲って酔うと、その人の人間性の悪いところを暴露する。</td></tr>
<tr><td>口に出す言葉も汚くなる。さらに、本心を表わす言葉も口に出す。</td><td>本音を吐くことがある。</td></tr>
</table>

[1] 王雪（2012）「共通話題を扱う「酒」に関する日中諺の対照比較考察」広島大学留学生教育に参照。

<table>
<tr><td>酒と人間関係</td><td>酒で結ばれた人間関係の複雑さと不信感が窺える。</td><td>酒は人間関係の潤滑油になる。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">酒と女色</td><td colspan="2">女色と酒が同一視され、女色を批判し、女を軽蔑する気持ちが窺える。</td></tr>
<tr><td>女色を知らない男は不完全である。
美人の故郷京都と美酒の故郷中国地方と並列する。
古酒と年増の女の共通点を語っている。</td><td>酒と女色は命を損ねたりするものであると戒める。
酒の味と女の手が同じくきめ細かいである。
酒は適量、女色が好きであるが、夢中にしないほうがよいと述べている。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">酒と健康養生</td><td colspan="2">酒は血を良くするので、適量に飲むと、体によい影響を与える。</td></tr>
<tr><td>生姜酒が寒気を防ぎ、体を暖める。また、酒の適量と酒の品質の良さは体によい影響を与える。</td><td>酒を飲みすぎたり、酒を飲む生活習慣を間違ったりすると、体に悪い影響を及ぼす。</td></tr>
<tr><td>酒と酒宴の礼儀</td><td>酒席上で、酒を注ぐ礼儀作法を述べている。</td><td>酒席上の酒令という遊びを述べている。</td></tr>
</table>

2.2 類似する諺から見た両国民衆の発想

元来、諺は民衆の知恵の総合とも言うべきものであることから、異なった民族の諺でも、形式から内容まで類似性を持っているものがある。次に、両言語の酒に関する類似する諺から両国民の発想を見てみよう。

J1「酒良く事を成し、酒よく事を破る」[2]
C1 「成事在酒，败事也在酒」（事を成すには酒にあり、事を破るには酒にある）

J2「鏡は容貌を見せ、酒は心を現す」
C2「镜中见人，酒中见心」（鏡の中から人が見え、酒の中から心が見える）

2　尚学図書（1981）が編集した『故事・俗信ことわざ大辞典』の「発刊にあたって」では、「ことわざは日本に古くから伝わるものが主ですが、中国にその源をもつものもすくなくありません。さらには西洋に由来するものもあります。中国に由来するものについては、でき得るかぎりその出典を明記し、西洋に由来するものについてもその出自をできるだけ明らかにし、参考のため原文（または英訳）を添えました」と述べているので、尚学図書（1981：487）によると、「J169」は、読み本『忠臣水滸伝 - 前』（山東京伝 1799-1810）にある。

J3「馬鹿者と酒酔いはよけて通せ」
C3「嘴后思仇人，君子避酒客」（喧嘩した後、［君子］を仇と思い込むので、君子は酒飲みを避ける）

J4「飲まぬ酒には酔わぬ」
C4「不吃酒的脸不红，不做贼的心不跳」（酒を飲まない人は顔が赤くならなく、泥棒をしない人は胸がどきどきしない）

J5「死んで千杯より生前の一杯」
C5「身后供酒万千盅，何曾一滴进嘴中。」（亡くなった人に供える酒は千杯も万杯もあるが、一滴も口の中に入ったことがない）

J1 と C2 は、酒のお蔭で円滑に事が運ぶこともあれば、酒のせいで失敗に終ることもある。酒が物事の成否を左右することができるといっている。酒は物事の成敗を左右する役目があると述べている。しかし、酒はほんとにそのような効用があるかどうかはやはり酒を運用する者次第である。酒は無生命の物であるので、全てを操るのは人間そのものである。

J2 と C2 は、鏡が姿形を映すように、酒を飲むと、普段見せない本心をさらけ出すものであると述べている。鏡はわが容貌を見せてくれるように、酒もわが心を見せてくれるという。酒を飲むと、アルコールの作用を借り、人間はついつい本音を言ってしまう傾向がある。したがって、酒は普段他人に見せられない自分の一面を見せる役割を果たすことができる。

J3 は、愚か者と酒酔いは相手にしないほうがよいということである。ここで、酒酔いが馬鹿者のように扱われ、人々に嫌われ、避けて通ったほうがいい。C3 の「君子」は、孔子によると、人間として最も修養の出来上がった人をさす。酒を飲み、酔った人は多く因縁をつけて、喧嘩するのが多い。従って、君子は敵だと誤解され、トラブルを起こさないために、酒酔いを避けるのである。

J4 と C4 は、原因があるからこそ結果があるという因果関係の喩えである。ただ、J4 の前句は、酒を飲まないと、酔わないことではなく、顔が赤くならないという表現である。後句は、泥棒でない人は泥棒のように、毎日誰かに捕まえられることが恐れないから、怖がることもないだろうといっている。

J5 は、死んでからたとえたくさん酒を飲むことができたとしても、少しもうれしくないといっている。生きているときの一杯のほうがよほど嬉しいと述べている。C5 は、人が亡くなったら、供えられる酒がたくさんあっても、一滴もその人は飲めるわけがないといっている。J5 と C5 は、諺に使われる言葉が少し異なるが、意味がほぼ同じであり、現実の社会で少しでも楽しめるなら、楽しんだほうがよい。死んだ世界はは

かないもので、誰も知らなく、千杯があっても、それは生きた人の想像するもので、実にあるかどうかは検証できないものである。これは中国人と日本人の実利的な発想を反映している。

上に挙げられた五組の日中諺では、形式も内容も酷似するもの（J1 と C1 、J2 と C2）もあれば、形式がやや異なっており、内容が似通っているもの（J3 と C3、J4 と C4、J5 と C5）もある[3]。諺に見られる発想そのものは中国語（漢文学）の影響を受けていることは容易に推測できるが、J3 のように多くの日本人も読み本などに親しめるようになり、このような漢文調の諺が生まれたと考えられる。酒は、飲む人飲む場によって、大いに役立つが、飲み方を間違えると、大失敗につながるといっている（cf. J1 と C1)。また、酒で人間の人柄も人間の本性も検証することができると思われている（cf.J2 と C2)。さらに、トラブルを起こさないために、酒酔いを避けたほうがいいという発想も両国民ともに持っている（cf.J3 と C3)。そして、両国とも、仏教思想は各分野に浸透しており、因がないと、果もあるわけがないという仏教の思想も窺える（cf.J4 と C4)。最後に、現世をしっかり把握しないと、後世があるかどうかということは問題で、即ち、後世のことより、現世の方が大事であるという考えが見られる（cf.J5 と C5)。

2.3 異なる諺に見られる両国民衆それなりの発想

2.3.1　両国の諺に見た人間の欲求

（日）J6「身代と杯は大きいほど良い」
　　J7「五合の酒は余るが一升の酒では足らぬ」
（中）C6「清酒红人面，白财动人心」
　　（清い酒は顔を赤くし、白い銀は心を動かす）
　　C7「古酒要吃，荆州要收」（古酒も飲み、荆州も返してもらう）

「人間生まれながらにして欲求を持ち、生育と共にさらにいろいろな種類の欲求を習得的に累積させていく。この欲求あるが故に行動があるという説明もできる」と穴田（1982：50）は言っているように、欲求は人間が生長することにしたがい、どんどん増えていくのである。一定の段階においてのレベルは一定の欲求によって、満足させていないと、人間は求め続けていくだろうと思われている。欲求、即ち、欲望は様々

[3] 注 2 で示したように、「J1」は確かな出所があるが、「J3」、「J4」、「J5」は、『故事・俗信ことわざ辞典』(1981) を参照した結果、中国の出典であるとはっきり書かれていなかった。日本人が自ら創作した諺であると考えられる。

な類型がある。J6 で述べているのは、金銭欲に関することである。酒飲みが杯の大小と身代の大小という類似性を利用し、杯も身代のように大きければ大きいほどがいいと自己弁解している。この諺には、人間の欲も出れば出るほど埋められないという暗示が潜んでいる。J7 では、少しのものは自制が働くので残り、たくさんあったら、安心して手をつけるのでかえって足りなくなることを示唆している。

一方、C6 では、「老酒（古い酒）」も飲むし、「荆州」も返還してもらうということから、人間は欲張りな者であると示唆している。また、酒は人の顔だけを赤くするが、財貨は人の心を動かし、人間の欲という所に触れているのである。C7 は、中国の古典故事に出る関羽という人物の物語によって作られた諺である。三国の蜀という国の大将であった関羽の傲慢さで、敵に孤立させ、荆州という町が隣の国にいる孫権に奪われた。

両言語の諺ともに、「酒」と「欲」を絡ませて、人間の欲求がいつまでも満たされることができず、益々大きくなることを異なる表現で表わしている。J6 と C6 は、人間の金銭欲に関する表現であるが、J64 では、「杯」と「財」は大きければ多いほどよいと述べ、C6 では、「酒」と「財」を取り合わせながら、これらが人心に及ぼす力を暗示している。一方、J7 と C7 は、人間の社会生活における自己実現の欲求に関することであるが、J7 では、具体的な数字「五合」と「一升」の酒の量を用いて、C7 では、「古酒」と「荆州」の質的な取り合わせで、人間の欲がだんだんと大きくなり簡単に満たされるものではないと述べている。

2.3.2　日本の諺に見られる日本人の処世術

（日）J8「情けの酒より酒屋の酒」
　　J9「濁酒も茶よりは勝る」
　　J10「一升徳利に二升は入らぬ」
　　J11「言えば言い得、飲めば飲み得」

酒の諺に反映されている日本人の処世術を見てみると、J8 は情けをかけてくれるより、酒の一杯でも飲ませてくれたほうが好いといっている。上辺だけの同情より実利を重んじる喩えである。「なさけ」に「さけ」をかけて語呂合わせでいう。J9 の「濁酒」はどぶろくのことである。清酒には劣るが、安酒のどぶろくでも酔うことができるから、酔わない茶よりはましであることを、ないよりましということに喩えている。J10 は一升入りの徳利に二升入る道理はないと述べている。ものにはそれぞれの用途に応じた限度があるということで、人の能力についてもいえる。J11 では、現実の世界で、言わなかったら、あなたの考えていることはだれもわからないので、損であり、どんどん飲んだら、飲む分だけ得になる。だから、実際にやらないということはしば

しば損につながっていると暗示している。金子（1983：283-284）は「諺の思想的基盤は、なんと言っても現実主義的な傾向が圧倒的に著しい。これは実際の経験の中に養われたものであるから、もとより当然である」と指摘しているように、以上の諺では、昔の日本人は見栄えより実利を重んじている発想が窺えるだろう。

2.3.3　中国の諺に見られる中国人の処世術

（中）C8「吃了哪家酒，就说哪家话」
（誰かの家の酒を飲んだら、誰かの言いなりにする）
C9「喝酒喝到人肚里，说话说到人心里」
（飲む時は、お酒はお腹に入り、話す時は相手に聞き入れてもらう）
C10「喝酒喝味，听话听音」
（酒を飲む時、味を味わい、話を聞くとき、本音を聞く）
C11「吃酒的望醉，放债的图利」
（酒を飲む人は酔うことを望み、金貸しする人は利益を望む）
C12「酒饮席面，话讲当面」
（酒は酒席で飲み、話は向かい合って話す）
C13「壶中无酒难留客，池中无水难养鱼」
（徳利の中には酒がないと、客を引き止めがたい、
池の中には水がないと、魚が養えない）

中国人の処世術は諺の中でどのように反映されているかを見てみよう。まず、C8 は中国人の現実的な発想を強調し、八方美人という処世術を述べている。実際に誰からうまい汁を吸ったら、情勢を見て上手に立ち回ることを指している。所謂、こざかしくて保身の術に長けていること、自分に不利なことや過ちを犯すかもしれないことに対しては、たとえそれが原則的な問題であっても当たらずさわらずの保身的な態度をとることである。C9 では、行動する時、注意すべきことを述べている。酒を飲むと、酒の行き着く先は無論腹の中である。話をするときは、要点を掴み、ずばり言い当てるべきである。C10 は、酒を飲む時、主に味を楽しむ。話を聞く時、言外の意味を注意しながら、聞くべきであると述べている。C11 では、人間は何事にしても、自分なりの目的を持っていると強調している。C12 の「席面」は宴席をさし、「当面」は向かい合うことをさしている。「酒」と「話」、「飲」と「講」、「席面」と「当面」はお互いに対照になっている。意味的には、宴席を開く時は皆在席しているので、酒も宴席の時に飲む。他の人に何か文句があったら、ごそごそ蔭で言わずに、会って話すべきであると述べている。C13 では、酒はお客を引き止める条件の一つであり、水は魚を育てる一つの条件であると述べている。備えるべき条件が揃えられないと、物事を済ま

せることができないと訓じている。前句は酒について、後句は魚について述べているが、両方とも条件が揃わないと、何事も出来ないといっている。

要するに、以上の諺から、次のようなことが窺える。まず、保身のために結局のところ大勢に順応し、波風を立てぬ処世術が賢明なのである。そして、他人の心を読み取る読心術が常に中国人の頭に根ざしている。人間同士の付き合いでは、率直で誠意を持つほうがうまくいくと述べている。また、人間は自分の目的を持ちながら、物事をするので、気をつけなくてはならないといっている。最後に、物事をする条件を先に備えなくてはならないと、何事もできないと示唆している。

2.3.4 酒の諺による中国人独特の発想——「度」

C14「喝酒不醉最为高，贪色不迷是英豪」（酒を飲むが、酔わないのは最高であり、色に耽るが、惑わされないのは英雄である）

C15「好酒食一滴，好花插一枝」（好酒は一滴飲み、美しい花は一輪差す）

C16「喝酒不要过量，用牛不要过度」（酒を飲みすぎてはいけない。牛を使いすぎてはいけない）

C17「好酒饮到微醉时，好花看到半开时」（おいしい酒は微酔まで飲み、美しい花は半開きの時まで見る。）

C18「不饮过量酒，不贪意外钱」（過量の酒を飲んではいけない、思いがけなく得たお金を貪ってはいけない）

酒は最も「度」と結びつきやすい概念である。酒の中にアルコールが含まれているので、適「度」に飲めば、アルコールが働き、人間の気分も上々になり、ほっとする感じになると言われる。しかし、酒を過「度」に飲めば、酔いが回り、頭も働かなくなり、自分をコントロールすることさえできないぐらいになる。それゆえ、ここでの「度」が所謂「酒を飲む程度」であり、中国人の伝統的な思想で喩えれば、儒教の「中庸」[4]思想である。具体的に諺の意味を見てみると、

---

4 「中庸」とは、古代中国で尊ばれた徳目の一つであり、特に儒教の開祖である孔子は、「中庸の徳たるや、至れるかな」（『論語』）と、その倫理的価値を称えている。「中」とは、極端に走らず、その時、その場で最も適切妥当な方法を取る。儒教には、文字通り『中庸』という書物があるが、その冒頭には「天の命ずる、これを性と謂う」と書かれている。これは、人間の本性には、もともと天命により善が与えられているのであり、心を平静にし、人間本来の自然なままに行動をすれば、みな中庸を得ることができるということである。(http://ja.wikipedia.org ウィキペディアフリー百科事典より)

C14 は、酒を飲んで酔わない程度と、色も耽って惑わされない程度とは同じことである。この度を越えないと、何の痛みもかゆみもなく、酒がちょうどいい程度に飲める。C15 では、美味しい酒なら、一滴を飲めばいい。その一滴の中に美味しさとコクが全て含まれていると述べている。一輪の花だけ飾ると、価値があり、美しく見せるのである。何かをするとき、少量適度でするほうはまだ新鮮感が残るので、相手に楽しみを与えるのである。度を越すと、元々よいものでも面白くなくなる。C16 は、酒を飲むには、過量に飲んではいけないことは、牛を使うことと同じようである。使いすぎたら、牛も疲れ、いつか働けなくなるので、使う程度をコントロールしなくてはならない。C17 における酒の微酔から花の半開きの観賞までは、C16 の意味と似通っている。ここでは、中国人の美意識も反映されている。つまり、少なく、軽い程度は物事を楽しむときの一番よい時期である。この程度を超えると、気持ちよさと美しさもなくなる。C18 も、同じく、過量の酒を飲むと、害になるから、飲んではいけないと戒めている。C14～C18 は、酒を飲むことを戒めると同時に、「度」の問題も強調している。中では、「不醉―不迷」、「一滴――一枝」、「不过量―不过度」、「微醉―半开」という言葉を用いて、対句形式で、適度適量が一番いいということを諺の中に反映している。酒を飲む戒めとする「度」のことが強調されている。中では、「不醉（酔わない）―不迷（惑わされない）」、「一滴（一滴）――一枝（一枝）」、「不过量（過量しない）―不□度（過度しない）」、「微酔（微酔）―半开（半開き）」という言葉を用いて、対句形式で、適度適量が一番いいということが諺の中に映されている。

以上の諺は中国人の中庸思想を表わしている。ヴァレ（2000：76）は「中庸は個人生活においても社会生活においても欠かせないこととされた。なぜなら中庸を保つことは『完全な平穏』を守ることにつながる。そこから世俗的な幸せがもたらされ、『家庭での正しい秩序』が確立し、結果的に国家の安定が約束されるからである」と述べているように、中国人はこの「完全な平穏」感を人生の指針とする傾向もあると諺の中から窺える。

2.3.5　中国の諺に反映される中国の社会状況

C19「买酒的不喝酒，喝酒的不买酒」（酒を買う人は酒を飲まないが、酒を飲む人は酒を買わない）

C20「酒杯一端，政策放宽；筷子一提，可以可以」（杯を持ったら、政策を寛大にする。箸を持ったら、何でもうまくなる）

C21「酒是软口汤」（酒は口を柔らかくするスープ）

C22「吃了酒，软了手」（酒を飲むと、手が柔らかくなる）

C23「吃人酒肉，塞自牙缝」（他人の酒を飲んだり、肉を食べたりすると、自分の歯の隙間に挟る）

C24「喝冷酒，使官钱，终究是祸害。」（冷酒を飲んだり、公の金を使ったりすると、結局災いを招く）

C25「秤砣虽小压千斤，酒杯虽小淹死人」（分銅は小さいが、千斤の重さが掛けられ、杯は小さいが、人を溺れさせることができる）

以上挙げたのは中国の社会状況を風刺している諺である。C19 では、酒を買う人（买酒的）は、賄賂を使う人で、酒を飲む人（喝酒的）は賄賂を受け取る人を指している。必ずしも酒を送るわけではないかもしれないが、酒は人に頼むために使う一種の贈り物の象徴である。中国の現状を語る諺である。また、杯を持ち（酒杯一端）、箸を取る（筷子一提）ことは、食事をすることを暗示している。C20 は、中国の高級幹部や偉い人たちにご馳走してあげたら、向こうもうまくやってくれると揶揄している諺である。中国社会の官界における腐敗現象が映されている。当然、人からの酒を飲むと、その人のことを庇うようになり、その人に対しても、手が下せなくなると C21、C22 では述べられている。即ち、誰かにご馳走してもらって、その上、プレゼントやお金までもらって、後に、その人のことに関与する事件を扱うことにあたり、手加減してはならないことになる。ただし、人からの酒を飲み、肉を食べた後、消化できるかどうかはまた問題になる。C23 はこういうことをいっている。歯の隙間（牙缝）は人間自身を喩えている。他人からの賄賂をもらい、自分の懐を肥やすという社会現象を端的に表わしている。さらに、C24 では、民衆のことを分銅（秤砣）と杯（酒杯）に喩え、政治家はまた民衆の力を無視してはいけない。「水能载舟，亦能覆舟」（水は船を載せることができるが、船を覆すこともできる）ということもあるから、民衆もいつか反抗し、政府を覆すことさえ可能であると戒めている。

以上の諺では、中国官僚世界の現状及び中国の幹部達がどんな実態をしているかが語られている。C23、C24、C25 では官界の幹部達に対する戒めである。すなわち、賄賂を貰うべきでない、民衆の力を無視してはいけないということを示唆している。

2.3.6　その他の発想

2.3.6.1　因果関係

（日）J12「飲まぬ酒は酔わぬ」

（中）C26「自己酿的苦酒自己品尝」（自分で醸造する苦い酒は自分で味わう）

J12 では、酒を飲まないのに酔うことはないといっている。原因があるからこそ結

果があるということの喩えである。同様に、C26 では、自分の作った悪い結果は自ら呑むしかないという自業自得のことをいっている。因があれば、果になるという発想は元々仏教の思想であったことから、中国も日本も仏教に大きく影響されていたことがわかる。諺における微妙な違いとして、J12 は、やらないと悪い結果にはならないことに対し、C26 は、やって至った悪い結果が自分で責任を負わなくてはならないといっている。また、J12 では、日本人は新しい物事に挑戦しないという消極的な一面を示しているのに対し、C26 では、中国人の積極的な一面と自己批判を見せてくれる。しかし、逆に言えば、日本人の思慮深い考えと中国人の衝動的な考えもここから少し窺えるだろう。

2.3.6.2　経験の重要性

（中）C27「好酒搅不酸,好人说不坏」（よい酒はいくらかき混ぜても酸っぱくならない、よい人はいくら言われても、悪くならない）

C28「酒陈味道醇，人老见识广」（酒は古いほど味も芳醇になり、人は年を取るほど見識も高くなる）

C29「酒陈性足，姜老味辣」（酒は古いのが芳醇で、生姜は古いのが辛い）

C27～C29 は酒のことを借り、人間の品格と経験を述べている。C27 では、よい酒、よい人にとって、どんな試練でも、耐えることができるといっている。酒の品質から、人間の品格まで、もう最初から決まっているものなので、途中でいくら妨げられても、変わらないものである。28C では、古い酒の味にコクが出ることは、人が年を取ると、自然に見たこと、経験したことも多いので、物事を見る力も付いていることと同じであるといっている。C29 は、人間という言葉は出ていないが、古い酒と古い生姜は人間のことを暗示し、古ければ古いほどいいことから、人間も年を取る方が経験を積んでいることを示唆している。中国では、年を取った人が経験も多いことは認められている。したがって、中国語の諺では、このような発想が反映されている。しかし、日本語の諺では、古い酒と経験の古さとを関連付けしたものが見当たらない。

3.終わりに

以上、日本語と中国語の「酒」に関する諺の内容を対照比較し、そこに見られる日本人と中国人が世間や物事に対する発想の類似点と相違点を明らかにすることを試みた。無論、あくまでも「酒」の諺に限られるので、分析結果も限られている。しかし、「酒」の諺に潜んでいる日中両国国民の発想の一部分を見ることができた。

共通の話題を語る諺の「普遍性」という面から、異なった民族の諺でも、諺におけ

る語句の組み合わせから諺の内容まで類似性を持っているものがある。諺の「特殊性」という面から、「酒」の諺に中国人の独特の発想――「度」の適切さ、所謂「中庸」の発想が見られる。

また、酒の諺に見られる人間関係についての発想では、まず、男と女では、日本人も中国人も、女と酒を同一視し、悪いもの同士であると見なしているが、日本語の諺では、また、日本人は女と酒を楽しみの一つとする考えも窺える。中国語の諺は、女と酒を批判する発想しか見られない。それから、親子・夫婦・友人関係では、日本人は親子関係と仲間的な関係を述べているが、中国語の諺では、夫婦関係と友人関係を述べている。さらに、日本人の処世術では、日本人の実利的な発想を取り上げ、中国人の処世術では、中国人の保身術と読心術を取り上げている。最後に、世の中、人生のあれこれにおいて、中国の官界における腐敗事情への批判、人間の無限の欲求なども述べられている。その他の考えでは、両国が仏教の影響で、因果関係も諺の中に現れている。また、中国人は酒と経験の古さに基づき、経験の重要性も認識している。両国の諺で両国の国民の発想をそれなりに反映しているのは興味深いことである。

酒に関する諺は、物質文化と精神文化の整合体として、民族の文化を表現し、そこに見られる発想は民族文化の深層部分の一つになっている。「酒は人類の造った嬉しい文化の一つである。さまざまな民族には大抵この文化があり、国民はそれに誇りと憧れ、親しみと浪漫を寄せながら長い歴史の中で育て上げてきた」と小泉（1992：235）は述べている。酒に関する諺を通し、酒を反映する文化が一つの角度から見えてくるだろう。

参考文献

王　雪（2012）「共通話題を扱う「酒」に関する日中諺の対照比較考察」
広島大学留学生教育
オドン, ヴァレ（2000）『中国と日本の神　仏教、道教、儒教、神道』遠藤ゆかり（訳）
温 端政　主编（2004）『中国谚语大全』上海辞书出版社
金子武雄（1983）『日本のことわざ』（全４巻）、（一）評釈、（二）続評釈、（三）評論（1983）、（四）概説・講説（1983）　海燕書房
小泉武夫（1992）『日本酒ルネッサンス ―民族の酒の浪漫を求めて―』中央公論社
尚学図書編集（1981）『故事・俗信諺大辞典』小学館
鈴木棠三（1962）『ことわざ処世術』東京堂
永山久夫・川嶋宏（1988）『日本の粋を伝えることわざ　酒　ことばの民俗学 6』創拓社
西谷裕子（2005）『たべものことわざ辞典』東京堂